

中国における中学校美術課程標準の変遷について

— 2022年版《義務教育美術課程標準》の改革を中心に—

福田 隆真*¹・楊 世偉*²

The Evolution of Art Curriculum Standards in Chinese Junior High Schools:
With Special Reference to the 2022 Reform of the Compulsory Education Art Curriculum Standards

FUKUDA Takamasa *¹, YANG Shiwei *²

(Received September 30, 2025)

キーワード：中国、教育課程、中等美術教育

はじめに

本稿は、1949年の中華人民共和国成立以降における中学校美術教育の基盤である「課程標準」の歴史的変遷を、史的事実に基づいて体系的に整理・記述することを目的とする。主観的な評価や新たな提言を行うのではなく、既存の研究成果を整理・要約することを通じて、中国の美術教育課程が各時代の社会背景とどのように連動して変容してきたかを概観し、特に2022年に公布された最新の課程標準についての具体的な変化を分析する。

21世紀に入って中国の基礎教育改革は深化段階に入り、知識伝達にとどまらない、変化の激しい社会を生き抜くための能力、すなわち「核心素養（コア・コンピテンシー）」の育成が教育理念の中心となった¹⁾。この流れの下で、2022年4月に中華人民共和国教育部より公布された『全日制義務教育芸術課程標準（2022年版）』（以下、『2022年版標準』）は、従来の教科の枠組みを大きく再編する内容を含んでおり、中国国内の研究者や教育関係者から「百年に一度の大きな変革」と評されて注目を集めている²⁾。本稿は、この最新改革に至る歴史的な文脈を整理した上で、『2022年版標準』の全体像と主要な改訂点を明らかにする。

本稿の中心的な分析対象である「課程標準」とは、中国において国家が定める教育課程の綱領的文書であり、各教科の教育目標、内容構成、学業の質に対する基本的要求を国家レベルで規定するものである。これは、教材の作成、学校での教育実践、学業評価に至るまで、教育活動全般の直接的な根拠となる。日本の「学習指導要領」が、各学校が教育課程を編成する上での基準を示し、一定の裁量を認めているのに対し、中国の課程標準はより強力なトップダウン型の規範として機能する点に、その特徴がある。

新中国成立以来の小中学校美術課程標準の変遷に関する先行研究は、三つの類型に整理できる。

第一は通史的研究である。張婷（2012）は新中国成立以来から2010年頃までの課程標準を六つの時期に分類し、各時期の歴史的背景、課程の設置、目標および内容を詳細に記述している³⁾。また、麻麗娟・福田隆真（2005）は建国期から2001年の改革までの社会変化と美術教育課程の関連を論じており、これらの研究は本稿の歴史的整理の基盤を提供する⁴⁾。

第二は理論的視座からの分析である。劉慧（2017）は中国教育における重要概念「双基（基礎知識と基本技能）」に注目し、その内容が時代とともにどのように変容してきたかを論じている⁵⁾。こうした研究は、各課程標準に内在する教育価値観の変遷を理解するための示唆を与える。

第三は比較研究および改訂に関する実務的分析である。麻麗娟・福田隆真（2013）は2011年版を中心に論じ⁶⁾、黄安琳（2023）は、2001年版、2011年版、そして最新の2022年版標準を直接比較し、その発展と理念の変化を分析している⁷⁾。また、郝赫（2022）は、義務教育段階の『2022年版標準』と高等学校の美術課程標準を比較し、学段を超えた「一体化」という視点から「核心素養」教育の連続性を論じている⁸⁾。さら

* 1 山口大学名誉教授 * 2 広島大学大学院人間社会科学部研究科

に、課程標準改訂グループの主要メンバーである尹少淳（2022）、杜宏斌（2022）、彭吉象（2022）らは、『2022年版標準』の改訂背景、指導思想、主要な変更点を権威ある立場から詳細に解説している。

本稿は、これら先行研究が示す事実情報を基盤として、時代背景と関連付けながら資料を再構成し、中国の美術課程標準の変遷の全体像を提示する。

本稿の構成は次のとおりである。第一章では、社会主義建設期から改革開放を経て2001年の「素質教育」改革に至るまでを扱い、美術教育が政治的機能の重視から「美育」へと移行する過程を概観する。第二章では、21世紀における「素質教育」深化期として、2001年版および2011年版の課程標準を詳細に分析する。第三章では、本稿の核心である『2022年版標準』を、「核心素養」という新たな理念を軸に、その改訂背景、目標、内容、方法、評価の各側面から詳細に分析する。最後に総括を行い、本研究の議論から導かれる展望と課題を提示することで、中国の中学校美術教育課程の現状と今後の課題を提示する。

1. 社会主義建設期から改革開放期へ：政治的機能と美育への転換（1949年～2001年）

1-1 模索と確立の時期：政治的機能と技能教育の重視（1949年～1978年）

(1) 時代背景：社会主義国家建設とソ連モデルの影響

1949年の中華人民共和国成立以降、国家は計画経済体制の下で社会主義国家の建設を最優先課題とした。この時期の教育は、国家イデオロギーの浸透と社会主義建設のための人材育成を目的とし、その体系は旧ソ連の教育モデルから強く影響を受けた。美術教育もこの枠組みに組み込まれ、芸術の自律的価値よりも国家建設や思想教育に資する政治的・社会的機能が重視された。⁹⁾

(2) 美術教育の目的と内容：「社会のための美術」

建国初期の美術教育は、国家に奉仕する「工具」として位置づけられた。1956年に公布された『小学・初級中学図画教学大綱（草案）』では、写実主義に基づく描写技能の育成を通じ、学生に愛国主義精神と民族的自負心を涵養することが明確に掲げられた。この時期、課程名は「美術」ではなく「図画」とされ、写生画や図案画、さらに社会主義建設や革命を題材とする命題画が中心を占めた。劉慧（2017）が指摘するように、この時期の「双基」（基礎知識と基本技能）は、政治的・社会的目的達成のための「工具的基礎」としての性格が強かった。¹⁰⁾

特に1966年から1976年の「文化大革命」期には、教育全体が強い政治的支配下に置かれた。伝統美術や文化は「封建的」として批判・排除され、美術教育はその発展を大きく阻害された。この時代の美術教育は「個人のための美術」ではなく、徹底して「社会のための美術」であった。

(3) 教育方法：「注入式」教授と技能訓練

建国初期から文化大革命終結までの教育方法は、教師が一方向的に知識や技能を伝える「注入式」が主流であった。旧ソ連の教育理論の影響を受け、授業は教師の模範提示と学生の模倣・反復練習を基本とした。評価基準も写実的描写の正確さや政治的主題の適切な表現に置かれ、学生の感性や創造性はほとんど考慮されなかった。¹¹⁾

1-2 「改革開放」と「美育」への転換（1979年～2001年）

(1) 時代背景：経済建設への転換と「素質教育」の萌芽

1978年の中国共産党第十一期中央委員会第三回全体会議を契機として始まった「改革開放」政策は、中国社会を政治闘争中心から経済建設中心へと大きく転換させた¹²⁾。国際社会への扉が開かれ、経済が急成長を遂げる中で、人々の価値観もまた多様化し始めた。教育界では、知識注入と受験偏重の「応試教育」への反省から、知識・技能のみならず道徳・身体・美意識・労働観を含む「全面的発達」を目指す「素質教育」が提唱され、美術教育の在り方にも見直しが迫られた¹³⁾。

(2) 美術教育の目的と内容：「個人の精神的な豊かさ」の追求

改革開放期に入り、美術教育の目的は、政治的機能の追求から、個人の情操を豊かにし、精神を育む「美育」へと大きく転換した。この転換を象徴するのが、1979年に公布された『全日制十年制学校中小学美術教学大綱（試行草案）』である。この大綱において、課程名が従来の「図画」から「美術」へと変更され、初めて「欣賞（鑑賞）」が、絵画、工芸と並ぶ独立した重要な学習領域として正式に位置づけられた¹⁴⁾。

「鑑賞」の導入は、中国美術教育にとって画期的であった。これにより、学生は自ら創作するだけでなく、

古今東西の優れた美術作品に触れ、その歴史や文化的背景を学び、美的感受性を育むことが可能となった。また、文化大革命期に否定された中国の「伝統文化」が再評価され、水墨画や民間美術といった民族文化の継承が教育内容として奨励されるようになった¹⁵⁾。この時期、美術教育の価値は「社会のための美術」から、「個人の精神的な豊かさ」へと大きく転換したのである。

(3) 教育方法：学科中心の教育方法への移行

「鑑賞」教育が導入されたことに伴い、教育方法も変化し始めた。単なる技能の伝達や模倣練習だけでなく、美術史の知識や作品の様式分析など、より学術的なアプローチが授業に取り入れられた¹⁶⁾。教師は、技能を教えるだけでなく、美術学としての知識体系を伝える役割を担うようになり、教育方法は徐々に学科中心へと移行していった。しかし、評価においては依然として技能の習熟度に偏る傾向が残り、理念と実践の間には乖離が存在していた。

2. 21世紀における深化：素質教育の時代（2001年～2021年）

2-1 「素質教育」理念の確立と2001年版課程標準

(1) 時代背景：グローバル化の進展と「素質教育」の全面的展開

21世紀に入ると、中国は急速な経済成長、グローバル化の進展、そしてインターネットに代表される情報技術の爆発的普及という新たな時代を迎えた。こうした社会の大きな変化は、従来の知識の暗記や再生能力を重視する教育では対応できない、新たな人材像を国家に求めた。国際社会で通用する創造性、実践力、そして豊かな人間性を備えた人材の育成が急務となり、1990年代から提唱されてきた「素質教育」の理念が、教育改革の中核思想として全面的に展開された。¹⁷⁾

この背景の下、2001年に教育部が公布した『基礎教育課程改革綱要（試行）』¹⁸⁾は、中国の基礎教育全体にわたる大規模な改革の幕開けを告げるものであった。美術教育もこの大きな改革の潮流の中に位置づけられ、新たな課程標準の策定が求められた。

(2) 2001年版課程標準の画期性：4つの学習領域の導入

2001年に公布された『全日制義務教育美術課程標準（実験稿）』（以下『2001年版標準』）は、「素質教育」の理念を具体化したものであった。最大の変化は、従来の「絵画」「工芸」といったジャンル別の区分を廃し、学習活動の方法を基準とする4つの学習領域を導入した点である。すなわち、①造形・表現、②設計・応用、③欣賞・評述、④総合・探索の4領域である。

①「造形・表現」：自分の感情や考えを表現するために、様々な素材やメディアを用い、造形活動を行う領域。

②「設計・応用」：生活を美しく、豊かにするという目的意識を持ち、デザインや工芸制作を行う領域。

③「欣賞・評述」：古今東西の美術作品や身近な美術事象を鑑賞し、その特徴や価値について自分の言葉で論評する領域。

④「総合・探索」：美術と他の教科、社会、文化などを関連付け、学際的かつ探究的な学習活動を行う領域。

この転換は、美術教育の枠組みを、教師が何を教えるかという「知識・技能本位」から、学生がどのような学習活動を経験するかという「学生本位」へと転換させる試みであった。目標においても、単なる知識・技能の習得だけでなく、学生の学習への関心を喚起し、美術活動の楽しさを体験させることが強調され、学生が学習の主体であるという理念が明確に示された¹⁹⁾。

2-2 2011年版課程標準における継承と発展

(1) 改訂の背景と特徴

2011年、教育部は『2001年版標準』の実施から約10年を経て、その理念と枠組みを継承・発展させた『全日制義務教育美術課程標準（2011年版）』（以下『2011年版標準』）を公布した。『2011年版標準』は、基本的な理念と4つの学習領域という枠組みを維持しつつ、いくつかの点で発展が見られた。

最も顕著な特徴は、中国の伝統美術や地域文化資源を一層重視した点にある²⁰⁾。これは、急速な経済発展とグローバル化の進展の中で、自国文化のアイデンティティ確立と継承の必要性が国家的に認識されたことを反映している。課程内容において、伝統工芸や民間美術、書道、水墨画などがより明確に推奨された。

(2) 目標設定と評価の深化

『2011年版標準』では、当時の教育改革全体に用いられていた「三維目標」（三次元目標）を課程の中心に据えた。それは、①知識と技能、②過程と方法、③情感・態度・価値観の三側面から教育目標を立体的に捉える枠組みである。

- ①「知識と技能」：美術に関する基本的な概念、用語、歴史的知識や、表現・鑑賞のための技能。
- ②「過程と方法」：美術学習の過程を体験し、探究、協力、創造といった学習方法を習得すること。
- ③「情感、態度、価値観」：美的感受性を豊かにし、美術を愛好する態度を育み、正しい価値観を形成すること。

この「三維目標」の導入により、「素質教育」が目指す全人的な育成目標が、より具体的に示されることになった。評価においても、単なる知識テストや技能の査定に留まらず、学生の学習過程や態度の変化をも含めた、より総合的な視点が求められた²¹⁾。麻麗娟・福田隆眞（2013）は、この改訂が美術教育の課題を新しい視点から再検討し、より科学的かつ実行可能な形へ改善を図ったものであると評価している²²⁾。

（3）「素質教育」時代の課題

しかしながら、「素質教育」の理念が教育現場に十分に浸透したとは言い難い。依然として根強く残る「応試教育」の価値観が、美術を含む非主要教科の授業時間を圧迫し、総合的・探究的な学習の実施を困難にしていた。

また、4つの学習領域は設定されたものの、実際の授業においては依然として孤立的に扱われ、領域間の有機的統合が不十分であった。こうした課題は、後の「核心素養」を中核とする課程標準改訂へとつながる要因となった。

3. 核心素養の時代：2022年版課程標準によるパラダイムシフト

3-1 改訂の時代的背景：「立德樹人」と「核心素養」の育成

『2022年版標準』の改訂は、21世紀における国際的な教育改革の潮流と、中国の「新時代」における国内的要請とが相互に作用した結果である。

国際的には、多くの国々が教育目標を知識の習得にとどめず、変化の激しい社会に対応するための能力、すなわち「核心素養（コア・コンピテンシー）」の育成に重点を置くようになった。これは、教育の中心が知識伝達から、知識を活用して現実の問題を解決する能力の涵養へと移行したことを示している。

国内的には、習近平政権下において教育の根本任務として「立德樹人」（徳を樹立し人を育てる）が最重要視され、思想道徳や価値観の形成が教育全体の最優先課題とされた²³⁾。この文脈において、美育は情操教育にとどまらず、健全な人格形成と社会主義核心価値観の涵養に寄与するものと再定義された²⁴⁾。特に2020年に国务院弁公庁が公布した『關於全面加强和改进新時代學校美育工作的意見』²⁵⁾は、大学から幼稚園に至るまでの連続的な美育体系の構築を求め、今回の改訂の直接的な政策的根拠となった。

さらに、今回の改訂には過去の経験に基づく反省も組み込まれている。2001年の『芸術課程標準（実験稿）』（2001年版美術課程標準と同時に編纂された）は理念こそ先進的であったが、多くの現場で実施困難に直面した。その主因について、改訂グループの中心人物である尹少淳（2022）は、課程構造が曖昧かつ非体系的であったこと（「粥状」と形容される）、そして複数の芸術分野を統合的に指導できる教員の不足を挙げている²⁶⁾。このため、『2022年版標準』では、芸術の総合化を目指しつつも各分野の独自性と体系性を尊重し、現場での実行可能性を確保することが重要な課題とされた²⁷⁾。

こうした国際的・国内的背景の下、『2022年版標準』は「核心素養」を指針とし、「立德樹人」を根本任務として掲げ、総合性と専門性の両立を目指す新たな方向性を提示したのである。

3-2 課程目標の転換：「芸術核心素養」の導入とその内実

『2022年版標準』における最も本質的な変化は、課程目標を『2011年版標準』の「三維目標」から「核心素養」を中心とする体系へと転換した点にある。これは、教育の焦点を「何を教えるか」から「学生が何ができるようになったか」へと移すパラダイムシフトであった²⁸⁾。

『2022年版標準』は、芸術課程全体に共通する核心素養として以下の4点を示している。

- ①「審美感知」（Aesthetic Perception）：自然、社会、芸術作品における美の特徴や意味を発見し、感受・理解・反応する能力を指す。これは全ての芸術学習の基礎であり、従来の「欣賞・評述」領域の目標を深

化させたものである²⁹⁾。

②「芸術表現」(Artistic Expression)：芸術活動において芸術的なイメージを創造し、思想や感情を表現し、芸術の美しさを示す実践能力を指す。これは従来の「造形・表現」領域の目標に相当し、メディアや技術、芸術言語を駆使する能力を含む³⁰⁾。

③「創意実践」(Creative Practice)：多分野の知識を総合的に活用し、現実生活と密接に結びつけながら、芸術的な革新と応用を行う能力である。これは「設計・応用」や「総合・探索」領域の目標を統合・発展させたもので、イノベーション意識と問題解決能力を重視する³¹⁾。

④「文化理解」(Cultural Understanding)：特定の文化的文脈における芸術作品の内実を感受・理解・解釈する能力を指す。これは、自国の優れた伝統文化を継承・発揚すると同時に、世界の多様な文化を尊重し、理解する態度を育むことを目的とする³²⁾。

この4つの核心素養は、学生が芸術学習を通じて育成すべき基本的資質であり、課程内容、教育活動、評価の全てに方向性を与えるものである。

注目すべきは、これらの核心素養が美術単独のためではなく、音楽・舞踊・演劇・映像を含む「芸術課程」全体を対象に設計されている点である。例えば、先行する高等学校の美術課程標準で提唱された五つの核心素養(図像識読、美術表現、審美判断、創意実践、文化理解)に含まれていた「図像識読」は、美術に特化しすぎており、音楽や舞踊には適用しにくい。そのため、義務教育段階の『2022年版標準』では、より汎用性の高い「審美感知」へと変更された。尹少淳(2022)が指摘するように、これは、各芸術分野に共通して適用可能な目標を設定するという、総合芸術課程としての配慮が働いた結果であり、芸術教育の目標が、個別具体的な知識・技能から、より汎用的で転移可能な能力と品格の育成へと移行したことを象徴している³³⁾。

3-3 課程内容の再編：「統合性」の強調と体系化

『2022年版標準』は、核心素養という新たな目標を実現するため、課程内容の構造を大幅に再編した。その最大の特徴は、尹少淳(2022)が指摘する「合写(共同記述)」と「分写(個別記述)」の併用という独特な構成方法にある³⁴⁾。

課程全体の性質、理念、総目標、核心素養といった共通理念に関わる部分は「合写」され、芸術課程としての一体性と総合性が強調される。一方で、具体的な学習内容や後述する「学業質量」基準は、音楽、美術、舞踊など各芸術分野ごとに「分写」され、それぞれの学問的体系と論理性が尊重されている³⁵⁾。この構造は、かつて2001年版の総合的『芸術課程標準(実験稿)』が陥った「粥状」の曖昧さを克服し、総合化と専門性の両立を図るための工夫であり、「石榴籽状(ザクロの種状)」構造と形容される³⁶⁾。

美術科目の内容構成においては、2011年版の4つの「学習領域」が、より能動的な活動を意味する4つの「芸術実践」として再編された。この枠組みの下に、16項目の具体的な「学習内容」と、それらを達成するための20項目の「学習任務」が配置され、「芸術実践-学習内容-学習任務」という体系的な構造が構築されている。

さらに、学段の設計においても、学生の発達段階に応じた統合が図られている。

①第1学段(1-2年生)：幼少期の総合的な学びを重視し、「芸術総合」として「唱遊・音楽」と「造型・美術」を中心とする。

②第2・3学段(3-7年生)：音楽と美術を主軸に、舞踊・演劇・映像を融合させる。

③第4学段(8-9年生)：専門性と興味関心を深めるため、「芸術選択」として複数の芸術分野から二つ以上を選択履修させる。

この設計は、芸術分野間の連携(横の統合)と、学段間の連続性(縦の統合)の双方を意図したものであり、「一体化」という改革の方向性を体現している³⁷⁾。

3-4 教学と評価における新たな要求：実践への転換

『2022年版標準』は、教育方法と評価のあり方にも大きな変革を求めている。

教育方法については、知識の伝達を中心とした伝統的な授業形態から、学生が主体的に探究する学習への転換が求められている。そのための具体的な方法として、「任務駆動型学習(Task-based Learning)」や「プロジェクト型学習(Project-based Learning)」などが推奨されている。これらは、学生を生活や社会と結びつけた「真実の文脈(情境)」に置き、具体的な課題を解決する過程で、知識や技能を総合的に活用し、

核心素養を育んでいくことを目指すものである³⁸⁾。

評価については、今回初めて「学業質量 (Academic Quality)」という概念が導入された点が画期的である。これは、各学段の終了時に学生が達成すべき学習成果の具体的なレベルを、核心素養に基づき記述したものであり、核心素養がどの程度育成されたかを評価するための基準となる³⁹⁾。これにより、従来の知識・技能中心の試験に代わり、学習過程や成果を多面的に評価する「表現性評価」や「档案袋評価 (ポートフォリオ評価)」など、より多元的な評価が推奨された⁴⁰⁾。

さらに、中学校卒業時の学力試験に芸術科目を組み込み、その結果を進学のための参考資料とすることが明記された点も大きな変化である。これは、芸術教育の地位を制度的に保証し、現場での実施を促進する強い政策的意図の表れであるといえる⁴¹⁾。

これらの新たな要求は、教師に対し、単なる知識の伝達者から、学生の学びを設計し、促進する「課程のリーダー」へと役割転換することを求めている⁴²⁾。教師自身の専門性開発と研修の重要性が、これまで以上に強調されているのである。

4. 新旧課程標準の比較考察と今後の展望

4-1 2011年版と2022年版の比較：継承と発展の視点から

『2022年版標準』は多くの点で革新的であるが、過去との断絶の上に成立したものではなく、『2011年版標準』が築いた成果を継承しつつ、時代的要請に応じて発展させたものである。以下ではその継承と発展の両側面について整理する。

(1) 継承された点

① 4つの学習領域の基本精神の継承

『2011年版標準』で確立された「造形・表現」「設計・応用」「欣賞・評述」「総合・探索」という4つの学習領域の枠組みは、その基本理念が『2022年版標準』において4つの「芸術実践」として引き継がれた。これは、この枠組みが過去10年以上の教育実践を通じて教師に広く受容され、学生の総合的な学習を促す上でその有効性が認められていたことを示している。静的な「知識領域」から能動的な「実践活動」へと深化はなされたが、根幹を成す理念は一貫している。⁴³⁾

② 中国伝統文化の重視

『2011年版標準』で強調された郷土文化や伝統美術の尊重は、『2022年版標準』において「文化理解」という核心素養としてさらに明確化・体系化された。特に、『2022年版標準』では、「中華の優れた伝統文化」に加え、「革命文化」、「社会主義先進文化」という「三大文化」の学習が明確に求められており、国家の文化的アイデンティティと価値観の形成をより一層強化する方向性が示されている⁴⁴⁾。すなわち、伝統文化の継承を新時代の国家建設の文脈に位置づけ直した点に特徴がある。

(2) 発展した点

① 教育目標のパラダイムシフト

最も重要な発展は、教育目標の転換である。『2011年版標準』の「三維目標」(知識と技能、過程と方法、情感・態度・価値観)は要素を並列的に扱っていたのに対し、『2022年版標準』の「核心素養」は、それらを有機的に統合し、学生が卒業後も社会で生きて働くための「必備の品格と鍵となる能力」として再定義した⁴⁵⁾。これにより、教育の焦点は「何を教えたか」から「学生が何を身につけたか」へと明確に移行した。

② 内容構成の革新：「統合性」の強化

『2011年版標準』では各学習領域が独立しがちであったのに対し、『2022年版標準』は音楽・舞踊・演劇などを含む総合的な「芸術課程」という枠組みを構築し、芸術分野間の横の統合と、学段間の縦の連続性を強調した。尹少淳(2022)が指摘する「合写」と「分写」の構造や、発達段階に応じた学段設計は、この統合性を具体化する仕組みであり、学際的な学習の展開を可能にした⁴⁶⁾。

③ 実施方法の具体化

『2022年版標準』は、「任務駆動型学習」や「プロジェクト型学習」といった具体的な指導法を推奨し、さらに「学業質量」という評価基準を導入した。これにより、抽象的理念にとどまらず、実践に至る方法論が示され、教師は能動的学びをより効果的に設計し、客観的に成果を評価するための具体的な拠り所を得ることが可能となる。

4-2 今後の中国美術教育への展望と課題

(1) 教育現場への示唆と教師の役割転換

『2022年版標準』の公布は、中国美術教育が新たな段階に入ったことを示す画期的出来事である。この標準は、教師に対し、単なる知識伝達者から学生の学習を設計・促進・評価する「課程の領導者」への役割転換を求めている。今後は、核心素養という理念を教育実践にどのように具体化するかが課題となる。

また、今回の改革が促す教科横断的なアプローチは、美術教育と他教科、さらには美術館や地域社会など学校外資源との連携を深化させる契機となる。デジタル技術の活用も含め、学校を越えたオープンでダイナミックな学習環境の構築が期待される。

(2) 長期的展望と残された課題

長期的には、この課程標準の下で育った世代が、豊かな感性と創造力、そして深い文化理解を身につけ、変化の激しい未来社会の様々な分野でその能力を発揮することが期待される。美術教育は、単に「絵が描ける生徒」を養成するのではなく、複雑な現代社会を主体的に生き抜き、より良い未来を創造するための「人間力」を育む教育として、その重要性を増していくであろう。

しかし、この壮大な理念を実現するためには、解決すべき多くの課題が残されていることも事実である。最大の課題は、新たな理念に対応できる質の高い教員の養成と現職研修の体系をいかに構築するかという点にある。総合的な芸術課程を担える専門性の高い教員の確保は、2001年の改革でも問題となった点であり、今回もまた改革の成否を分ける鍵となる。また、核心素養を育成する教材の開発や、「学業質量」に基づく評価制度の構築と現場への定着も、今後の重要な課題である。これらを克服し、理念と実践の乖離を埋める不断の努力が今後の中国美術教育に求められている。

おわりに

本稿は、1949年の中華人民共和国成立以降の、中学校における美術課程標準の歴史的変遷を、社会的背景との関係において整理・分析した。その変遷は、国家の要請を反映しつつ、美術教育の目的と価値がダイナミックに変容してきた過程である。

建国初期から改革開放以前の美術教育は、「社会のための美術」として位置づけられ、国家建設への奉仕が第一目標であった。この時期は、政治的機能が重視され、写真に基づく技能訓練が中心であり、美術は「工具」としての性格が極めて強かった。

1970年代末の改革開放以降は、社会が経済建設中心へと移行するなかで、美術教育の目的は個人の情操を育み、精神的な豊かさを追求する「美育」へと転換した。この時期、「鑑賞」が独立した学習内容として導入され、文化大革命期に否定された伝統文化が再評価されるなど、教育内容の多様化と深化が進んだ。

そして21世紀に入ると、「素質教育」の理念の深化を背景に、4つの学習領域が導入され、学生の主体的な学びを促す枠組みが整備された。その流れは、2022年版課程標準における「核心素養の育成を重視する芸術教育」という新しいパラダイムへと結実した。この歴史的変遷は、「個人精神の豊かさと社会のための美術」や「伝統文化と現代文化」といった二項対立的な視点が、時代ごとに比重を変えながら、螺旋的に発展してきた歴史であると言える。

2022年版芸術課程標準は、70年以上にわたる発展の現段階における集大成である。それは、単なる教科内容の改訂に留まらず、中国の美術教育が新たなステージへと移行したことを示す画期的な文書として歴史的意義を有する。

第一に、それはグローバル化と情報化が進む現代中国の教育理念を反映している。「核心素養」という国際的な教育潮流を取り入れつつ、「立德樹人」という国内の教育目標を融合させた点は、国際社会で通用する創造的人材の育成と、国家的アイデンティティの確立を同時に目指す姿勢を示している。

第二に、過去の改革の経験と反省を踏まえ、理念と実践の統合を重視した点に意義がある。2001年の総合芸術課程が直面した課題を克服するため、「合写」と「分写」という構造的工夫によって総合性と専門性の両立を目指し、「学業質量」という具体的な評価基準を導入することで、理念が現場で実行可能な形に設計されている。これは、中国の教育改革がより成熟した段階に入ったことを示している。

この教育理念を実現するには、今後、現場レベルで解決すべき課題が多い。最大の課題は、新たな基準に対応できる質の高い教員の養成と研修体制の整備である。総合的な芸術課程を担える専門性を持ち、プロジ

ェクト型学習などを設計・実践できる教員の確保は、改革の成否を左右する鍵となる。

さらに、核心素養を具体化する教材の開発、「学業質量」に基づく評価制度の構築と定着も重要な課題である。理念と実践の間の隔たりを埋め、この「百年に一度の変革」を子どもたちの未来に資する力へと変えていくためには、今後も長期的かつ着実な努力が不可欠である。

本稿では課程標準の文献分析を中心に論じたが、今後は新しい基準が教育現場でどのように解釈・実践されるかを追跡する実証的研究が必要である。また、この改革が学生の学習成果や教員の専門性にどのような影響を与えるのかを、長期的に検証していくことも今後の重要な課題となる。

付記

本稿の作成にあたり全体構想を福田が担当し、本文を楊が執筆した。

注

- 1) 郝赫：「一体化的核心素養美術教学へ—《義務教育芸術課程標準（2022年版）》与《普通高校美術課程標準（2017年版2020年改訂）》の対比と接続」, 美育学刊 2022年5期第13卷, pp.113-115, 2022.
- 2) 尹少淳：「美術課程から芸術課程まで—『義務教育芸術課程標準（2022年版）』解析」, 『課程・教材・教法』第42巻12期, p.32, 2022.
- 3) 張婷：「新中国小中学校美術課程の発展過程とその啓示」, 江西師範大学修士論文, 2012.
- 4) 麻麗娟, 福田隆眞：「中国における教育課程と美術教育課程の変遷について」, 教育実践総合センター研究紀要 20, pp.79-91, 2005.
- 5) 劉慧：「流動的な「双基」—新中国以来の小中学校美術課程基準の解説に基づく」山東師範大学修士論文, 2017.
- 6) 麻麗娟, 福田隆眞：「中国における新しい美術教育課程改革の動向について—2011年の《全日制義務教育美術課程標準》の改訂を中心に—」研究論叢. 第3部63巻, pp.235-240, 2013.
- 7) 黄安琳：「新世紀義務教育芸術課程標準発展過程と觀念変化」, 西南大学修士論文, 2023.
- 8) 郝赫：「一体化的核心素養美術教学へ—《義務教育芸術課程標準（2022年版）》与《普通高校美術課程標準（2017年版2020年改訂）》の対比と接続」, 美育学刊 2022年5期第13巻, 2022.
- 9) 劉慧：「流動的な「双基」—新中国以来の小中学校美術課程基準の解説に基づく」山東師範大学修士論文, pp.8-10, 2017.
- 10) 劉慧：「流動的な「双基」—新中国以来の小中学校美術課程基準の解説に基づく」山東師範大学修士論文, p.9, 2017.
- 11) 劉慧：「流動的な「双基」—新中国以来の小中学校美術課程基準の解説に基づく」山東師範大学修士論文, p.11, 2017.
- 12) 張婷：「新中国小中学校美術課程の発展過程とその啓示」, 江西師範大学修士論文, p.28, 2012.
- 13) 張婷：「新中国小中学校美術課程の発展過程とその啓示」, 江西師範大学修士論文, p.35, 2012.
- 14) 張婷：「新中国小中学校美術課程の発展過程とその啓示」, 江西師範大学修士論文, p.30, 2012.
- 15) 張婷：「新中国小中学校美術課程の発展過程とその啓示」, 江西師範大学修士論文, p.31, 2012.
- 16) 張婷：「新中国小中学校美術課程の発展過程とその啓示」, 江西師範大学修士論文, p.30, 2012.
- 17) 黄安琳：「新世紀義務教育芸術課程標準発展過程と觀念変化」, 西南大学修士論文, pp.16-20, 2023.
- 18) 中華人民共和国教育部サイト, http://www.moe.gov.cn/srcsite/A26/jc_jcjcgh/200106/t20010608_167343.html
- 19) 麻麗娟, 福田隆眞：「中国における教育課程と美術教育課程の変遷について」, 教育実践総合センター研究紀要 20, p.86, 2005.
- 20) 麻麗娟, 福田隆眞：「中国における新しい美術教育課程改革の動向について—2011年の《全日制義務教育美術課程標準》の改訂を中心に—」研究論叢. 第3部63巻, p.236, 2013.
- 21) 麻麗娟, 福田隆眞：「中国における新しい美術教育課程改革の動向について—2011年の《全日制義務教育美術課程標準》の改訂を中心に—」研究論叢. 第3部63巻, p.236, 2013.

- 22) 麻麗娟, 福田隆眞:「中国における新しい美術教育課程改革の動向について— 2011年の《全日制義務教育美術課程標準》の改訂を中心に—」研究論叢. 第3部63巻, pp. 237-239, 2013.
- 23) 杜宏斌:「核心素養に焦点を当てて美育機能を際立たせる—義務教育芸術課程標準(2022年版)解説」、基礎教育課程, p. 58, 2022.
- 24) 彭吉象, 項陽:「2022年義務教育芸術課程標準解説」, 北京舞蹈学院学報 2022年第5期, p. 143, 2022.
- 25) 中華人民共和国教育部サイト, http://www.moe.gov.cn/jyb_xxgk/moe_1777/moe_1778/202010/t20201015_494794.html
- 26) 尹少淳:「美術課程から芸術課程まで—『義務教育芸術課程標準(2022年版)』解析」, 『課程・教材・教法』第42巻12期, p. 32, 2022.
- 27) 尹少淳:「美術課程から芸術課程まで—『義務教育芸術課程標準(2022年版)』解析」, 『課程・教材・教法』第42巻12期, p. 33, 2022.
- 28) 杜宏斌:「核心素養に焦点を当てて美育機能を際立たせる—義務教育芸術課程標準(2022年版)解説」、基礎教育課程, p. 58, 2022.
- 29) 彭吉象, 項陽:「2022年義務教育芸術課程標準解説」, 北京舞蹈学院学報 2022年第5期, p. 148, 2022.
- 30) 彭吉象, 項陽:「2022年義務教育芸術課程標準解説」, 北京舞蹈学院学報 2022年第5期, p. 148, 2022.
- 31) 彭吉象, 項陽:「2022年義務教育芸術課程標準解説」, 北京舞蹈学院学報 2022年第5期, p. 148, 2022.
- 32) 彭吉象, 項陽:「2022年義務教育芸術課程標準解説」, 北京舞蹈学院学報 2022年第5期, p. 149, 2022.
- 33) 尹少淳:「美術課程から芸術課程まで—『義務教育芸術課程標準(2022年版)』解析」, 『課程・教材・教法』第42巻12期, p. 35, 2022.
- 34) 尹少淳:「美術課程から芸術課程まで—『義務教育芸術課程標準(2022年版)』解析」, 『課程・教材・教法』第42巻12期, p. 34, 2022.
- 35) 尹少淳:「美術課程から芸術課程まで—『義務教育芸術課程標準(2022年版)』解析」, 『課程・教材・教法』第42巻12期, p. 34, 2022.
- 36) 尹少淳:「美術課程から芸術課程まで—『義務教育芸術課程標準(2022年版)』解析」, 『課程・教材・教法』第42巻12期, p. 33, 2022.
- 37) 周信達, 薛倩琳:「美術から芸術へ—『義務教育芸術課程標準(2022年版)』研究」、中国小中学校美術, p. 8, 2022.
- 38) 杜宏斌:「核心素養に焦点を当てて美育機能を際立たせる—義務教育芸術課程標準(2022年版)解説」、基礎教育課程, p. 64, 2022.
- 39) 尹少淳:「美術課程から芸術課程まで—『義務教育芸術課程標準(2022年版)』解析」, 『課程・教材・教法』第42巻12期, p. 37, 2022.
- 40) 劉慧:「流動的な「双基」—新中国以来の小中学校美術課程基準の解説に基づく」山東師範大学修士論文, p. 51, 2017.
- 41) 周信達, 薛倩琳:「美術から芸術へ—『義務教育芸術課程標準(2022年版)』研究」、中国小中学校美術, p. 16, 2022.
- 42) 周信達, 薛倩琳:「美術から芸術へ—『義務教育芸術課程標準(2022年版)』研究」、中国小中学校美術, p. 18, 2022.
- 43) 尹少淳:「美術課程から芸術課程まで—『義務教育芸術課程標準(2022年版)』解析」, 『課程・教材・教法』第42巻12期, p. 36, 2022.
- 44) 彭吉象, 項陽:「2022年義務教育芸術課程標準解説」, 北京舞蹈学院学報 2022年第5期, pp. 145-146, 2022.
- 45) 杜宏斌:「核心素養に焦点を当てて美育機能を際立たせる—義務教育芸術課程標準(2022年版)解説」、基礎教育課程, pp. 58-60, 2022.
- 46) 尹少淳:「美術課程から芸術課程まで—『義務教育芸術課程標準(2022年版)』解析」, 『課程・教材・教法』第42巻12期, p. 34, 2022.